

主 題：律法と私

聖書箇所：ローマ人への手紙 7章7-13節

人々の誤解

どんなときにもどんなところにも主のメッセージに反対する人々は存在するものです。パウロの語ったメッセージに人々は反対しました。私たちはローマ人への手紙6章から、パウロのメッセージの真意を誤解し、彼のメッセージに反対して来た人々に対するパウロの説明を繰り返し見て来ました。

(1) パウロは罪を助長している

6章の初めで、ある人々は罪が赦されることによって神のすばらしさが現わされるのなら、私たちはもっと罪を犯し続けなければならないのだ、パウロは罪を助長している、そのような生き方を教えていると、パウロに非難を浴びせたのです。パウロはそれに対して「そうではない」ということを教えました。

(2) パウロは律法を無視している

また、6：15から7：6までは、パウロは律法ではなく恵みの下にあるのだから自分の好きなように生きていい、律法を無視して好き勝手に生きていいのだというメッセージを語っていると非難しました。パウロは「とんでもない、そのような生き方を私は教えていないし、そのような生き方は神が教えていない」という説明をしたのです。

(3) パウロは律法を悪いものにしていく。

そして、今日、私たちが見て行く7章7節から7章の最後まで、パウロは、ある人々がパウロは律法は悪いものだと言っていると非難したことに対して、パウロは説明を加えるのです。パウロが語った律法は、神がモーセを通して人に与えた教えであり、戒め、命令です。神が何を望んでおられるのか、そのことを私たちは律法を通して知ることができるのです。もちろん、イエスが特にマタイの福音書15章で非難されるように、人々は神のメッセージと人間の教えとを混ぜこぜにして、人間の教えもあたかも神の教えであるかのように言って、守らなければいけないと人々に非常に大きな重荷を乗せたのでした。その律法に関してモーセは、エジプトの地から出て来て今まさに新しい地に入ろうとしている新しい世代の者たちに対して、このように語りました。申命記6：1「これは、あなたがたの神、主が、あなたがたに教えよと命じられた命令——おきてと定め——である。あなたがたが、渡って行って、所有しようとしている地で、行なうためである。」と。モーセはこのようにこの律法は神があなたたちに与えた大切な教えであり、命令であると教えました。だから、ユダヤ人たちはその律法を大切に扱ったのです。神からのメッセージ、神の教えだから、神がくださった命令だから…と。

確かに、パウロのメッセージを聞いていると、このすばらしい律法に対して、それがあたかも悪いものであるかのように思えるメッセージを語っていることは事実です。もうすでに、私たちは見て来ました。3：20では「なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」、4：15「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。」、7：4「私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。」、7：6「しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。」、このように見て行くと、確かに、律法は悪いものであるかのような印象を受けます。だから、パウロに反対する人たちはパウロはそのようなメッセージを語っていると非難したのです。

律法のすばらしさ 7 a 節

果たして、そのようなことをパウロは教えたのでしょうか？パウロははっきり反論し否定しています。7：7 a 「それでは、どういうことになりますか。律法は罪なののでしょうか。絶対にそんなことはありません。」と言い、7：12では「ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。」と告白しています。パウロは律法はすばらしいものだと言論し、そのことを教えようとするのです。なぜなら、それはパウロ自身が信じていたことだからです。そして、この律法のすばらしさ、大切さを知るということは、私たちにとっても大切なことなのです。なぜなら、律法を知ることによって私たちは本当の自分を知ることになるからです。律法はあなたがあなた自身を知るために大切な働きを為すのです。そこで、パウロはこの7節から13節までに四つのことを私たちに教えようとします。特に、律法が私たちに為す三つの働きを説明し、最後にもう一度、罪の恐ろしさを強調します。

☆律法のすばらしさ、律法が私たちに為す働き

A. 律法は罪人であることを明らかにする 7 b 節

律法はあなたがどのような者かを明らかにします。7節の中程に「**ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。**」と書かれています。この「知る」ということばは「わかる」という意味です。つまり、パウロはここで律法によって本当の自分がわかったと言っているのです。

律法によってパウロがわかったこと

(1) 罪の深刻さがわかった

パウロは自分は神の前に良い人間だと思っていた、ところが、実はそうではなくて、私は神の前にいかに罪深い者であるかがわかったと言うのです。自分がどれほど罪に染まり、どれほど汚れているか、その罪の深刻さが律法によってよくわかったと言うのです。なぜでしょう？

(2) 主なる神が何を望んでおられるのかがわかる

律法は先ほど見たように神の教えであり神の命令です。律法は神のみこころなのです。主なる神が私たち人間に対して何を要求しておられるのか、その神の要求が記されているのです。

(3) 神の基準が明らかにされ、自分を吟味することになる

この律法が私たちに与えられることによって、これが神が望んでいること、そして、私たち自身がどのように生きているのか、私たちは初めてそこで神の備えてくださった正しい基準によって、自分を比べることができるのです。神の基準が与えられることによって、その基準と自分を比較するとき自分がどのような存在なのかが明らかになって行くのです。なぜなら、神の基準が明らかにされて、神が私たちに何を望んでおられるのかを私たちが知ったときに初めて、私はどのように生きているのか、私はどんな存在なのかがはっきりするからです。神の基準がなければ私たちは好き勝手に生きるわけです。でも、神がこのように生きなさい、このように歩みなさい、こういうことをしなさいと言われたときに、私たちは初めてそのように生きているのか、そのような人になっているのか、そのようなことを守り行なっているのかと自分自身を吟味することができます。そして、私たちが正直に、神が望んでおられる姿と自らを比較するとき、私たちはどれほど神のみこころから外れた者であるかが明らかになるのです。

ひとつの例

そのことを教えるためにパウロはここで一つの例を上げています。7節の後半に「**律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。**」とあります。「むさぼり」、国語辞典では「欲深く物を欲しがること、際限なく欲しがること、満足することなく欲しがること、また、飽きることなくある行為を続けること」とこのように定義されています。ギリシャ語の辞典ではこのような説明がされています。「禁じられているものを憧れること」と、そして、「情欲、欲望」というようにこのことばは訳されています。確かに、これは十戒の中の最後の戒めです。パウロがここで教えていることは「**むさぼってはならない**」という神の命令が与えられ、その命令をしっかりと見つめるとき、「むさぼり」という思いが自分の中に存在していることに私たちは気付かされるということです。「**むさぼってはならない。**」と言われるとき、初めて、私たちはその思いが自分のうちにあることに気付かされるのです。そして、同時に、そのとき、私は神がしてはならないというを行なっている者だということにも気付くのです。だから、私は神の基準から外れていると、そのことが明白にされ、神があなたは罪を犯している、罪人だと言われても、私たちはだれもそれに反論できないのです。

「むさぼり」は大きな罪です。なぜなら、「むさぼる」のは自分自身のうちに満足がないからです。ですから、私たちは何とか満足を得ようと様々なものを欲しがるのです。皆さんの中でむさぼりを経験したことの無い人はいないでしょう。残念ながら、それがあからこの社会では物が売れて行くのです。新しい物が出たらそれが欲しくなる、あれを手に入れば私はもっと喜びが満ち溢れるとか、これがないから私はこのように不満足なのだ、いつも喜びがないのだと言って、物によって心の満足を得ることができると思います。もしも環境を変えることができるなら私は満足を得ることができるのではないかと私たちは言います。残念ながら、私たちの心の中はそのようにいつでももっと欲しい、もっと手に入れたいという思いがあるのです。「**むさぼってはならない。**」という命令が与えられたことによって、初めて、自分のうちにあるものが見えるのです。それが見えたときに、神がしてはならないというその命令、戒めに対して、私はその戒めを破っていることに気付かされるのです。なぜなら、私たちは神がしてはならないということをしており、神がしなさいと言われることをしていないからです。

もし、私たち一人ひとりがすべてのことに満足していたら何も求めないはずですが、自分に満足がない人はその満足を得ようと様々なものを欲しがるのです。信仰者の皆さん、あなたが考えなければいけないことがあります。イエスを信じる前のあなたがそのような生き方をしていたことはわかります。なぜなら、だれ一人として、主イエス・キリストのもとに来るまで本当の満足を経験することはないからです。でも、イエス・キリストを信じたあなたは神から一番必要なものを与えられたのです。この世のあ

らゆるものをもって埋めることのできないその心の空洞を神によって埋めることができたのです。それにもかかわらず満足していないとするなら問題があると思いませんか？なぜでしょう？神はあなたのすべての必要を満たすと言われたわけでしょう？それが信用できない、だから、自分でその満たされていない部分を満たさなければいけないと…、これは不信仰の罪を犯しているのです。パウロはどんな境遇にあっても私は満ち足りることを学んだと言います。詩篇の著者が教えてくれるように、私は乏しいことがない、なぜなら、私のすべての必要を満たしてくださいる主が私とともにいてくださるからです。これほど大きなすばらしい約束はありません。それにもかかわらず、私たちクリスチャンは救われる前と同じように、自分の満足を自分で満たそうと神以外のところにその答えを求めていますか？その行動、その選択は主では不十分だということを明らかにするものです。なぜ、神の約束を信じないのでしょうか？主なる神以外に自分の心を満たし満足をもたらしてくれるものがあるとしていることの証拠だからです。そのような生き方は神が喜ばれないことは明らかです。私たちの信仰は、神は絶対者であり全能の方であり全知唯一の真の神であるゆえに、私たちは神が言われたことは必ずそのようになることと信仰をもって信じて、神に信頼を置いて歩み続けて行くのです。

神は私たちにこの命令を与えてくださった。それによって私たちが「むさぼり」の思いをもっているということに神は初めて気づかれたのではありません。神はもうすでにそのようなことはご存じです。私たちが自分のことをわかっていなかったのです。「こうしてはならない」という命令をいただいたとき自分は何とその命令をことごとく破ってきたか、しかも、信仰を持っていながらもなお、神以外のところに答えを求めようとしている自分の愚かさ、罪深さに気づくのです。ですから、律法は私たちがどれほど罪深い存在であるかということをはっきりさせるのです。あなたが思っている以上に、私たちは罪深い者なのです。

パウロはどうしてここで十戒の最後の戒めを挙げたのでしょうか？ムーという神学者は「これはユダヤ人の伝統に基づいて、最後の戒めを挙げることでその戒め全部を概括した。」と言います。この最後の戒めを与えることによって、その戒めのすべてを語っているのです。なぜなら、私たちがその戒めの一つ一つを見て行くとき、私たちはその戒めに逆らっていることが明らかになります。たとえば、第一戒「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」（出エジプト 20 : 3）、確かに、私たちは偶像が祭られているところで手を合わすことはないでしょう。しかし、私たちの日々の生活において偶像ではないかと思われるものはありませんか？ある人は自分の持ち物が偶像かもしれない、自分の趣味が偶像かもしれない、仕事が偶像かもしれません。それらが神よりも大切になっていませんか？残念ながら、私たちはいろいろな偶像を抱えて知らず知らずのうちにそれらに頭を垂れてしまっているのです。「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。」（出エジプト 20 : 4）。このような命令が与えられることによって、私たちは自分自身がこれらのおきてをことごとく破っていることを知らされるのです。神が「しなさい」と言われることをしないだけでなく、神が「してはならない」と言われることをしている、罪人であることに気づかされるのです。

B. 律法は神に逆らう者であることを明らかにする 8 a 節

二つ目に律法がなすこと、それは8節に出て来ます。「しかし、罪はこの戒めによって機会を捕え、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。」、律法は神に逆らう者であることを明らかにします。パウロは「機会を捕え」というおもしろい表現をしています。罪がチャンスをおねらっていると言うのです。罪が自分の為したい働きを為すためのチャンスです。パウロが言っていることは「むさぼり」を引き起こしたのは戒めではなく罪だということです。私たちが生まれながらに持っている罪がこのようなことをすると言うのです。

1) 律法は私たちが生まれながらに持っている罪に機会を与える

実は、これは反発、逆らうことです。神の命令を聞くとき、ある人たちはその命令の前にへりくだって謙虚に受け入れるでしょう。しかし、ある人たちはその命令に逆らって反発を覚えるのです。「なぜ、従わなければいけないのか、私の人生なのだから好きなように生きたい、他のことならともかく、このことに関しては私の好きなようにさせてほしい」と、罪は見事にそのように機会をとらえて、主に従うように私たちを励ますのではなく、主が望んでおられることに逆らって、かえって罪が望むこと、つまり、主に逆らうことを選択するように働きかけるのです。多くの皆さんが経験したように、反抗期が人間の成長には必要であるかと一般的には認められています。人はある時期になると反発します。例えば親に反発します。私が特別集会に行った後に教会に戻ったのは、私の親が教会に「行くな」と言ったからです。もし、教会に「行け」と言われたならきっと行かなかったと思います。反抗期だったからです。母が言うことの全部に逆なことをしました。「行くな」と言われたから「行く」、「行け」と言われたら行かなかった、余りにも強く「行くな」と言うから「じゃあ行くぞ」と行ったことを今でも思い出します。皆さんもこのことはよくお分かりになるでしょう？皆さん、私たちは何度も神の命令を耳

にしますが、あなたはそれに喜んで従って行こうとされますか？これは立派な信仰をもっている人に対して神は言われていることで、私のような信仰の弱い者には無理ですと条件をつけていませんか？私たちが覚えるべきことは、みことばを聞いた者にはそれを実践するという大きな責任が与えられているということです。もし、みことばを無視するなら私たちは神の命令に従っていないということです。神が私たちに望んでおられることは「これがわたしのみこころです。このように生きなさい」と言われることを実践することです。しかし、罪は私たちのうちに働いていろいろな言い訳をもって、私たちがそれに従って行かないように働き続けると言います。私たちはいつまで経っても神の前に謙虚になつて行かないのです。イスラエルの民がどのような歩みをしたのか、彼らは神の数々の奇蹟を見て来ました。皆さんは、もし、私がそのところにいたならイスラエルの民のような選択はしない、あのような奇蹟を見たならもっと熱心に忠実に主に従っていたにちがいないと思いませんか？私は思いました。でも、聖書によって自分が分かって行くとき、彼らの信仰のほうが私よりも強いのではないかと思ったことがあります。イスラエルの民に対して、神はモーセを通してこのように言われました。申命記9：7「あなたは荒野で、どんなにあなたの神、主を怒らせたかを覚えていなさい。忘れてはならない。エジプトの地を出た日から、この所に来るまで、あなたがたは主に逆らいどおしであった。」、ずっと逆らい続けて来たと、私たちはイスラエルの人々の選択を見、彼らの失敗を見るとときに彼らをさばくことはできません。そこに自分を見るからです。私たちは彼らよりも神がどういう方なのか、聖書を通して知らされているにもかかわらず、神の命令に逆らい続けているからです。

2) 不従順→神を愛する者と言えるか？→罪

私たちが神のみことばを聞くときに、何度も皆さんにお話ししているように、あなたには大きな責任が生じたのです。そのみことばを守り行なっていくという責任です。今モーセが主のメッセージを語りました。主のことを忘れてはならないと。そうすると、もし、皆さんがメッセージを聞いてそれで終わっているとすれば、それは間違っていると思いませんか？聞いた者たちには責任が生じたのです。神があなたにこうなさいと言われたことに対して、あなたがするかしないかというのは、確かにあなたの大きな選択ですが、同時に、神は大きな責任をあなたに託されたのです。ですから、ただみことばを聞くだけでそれを実践しないことがいかに神に対する罪であるかということに私たちは気づかなければいけないのです。聞いた者たちはそれを行なっていくという責任があるのです。そのときに神のみわざが為されて行くのです。祝福があります。神はあなたを変えて行かれます。しかし、私たちはいつも聖書が言っていること、神が言われていることはわかるけれど、私はできない…と、そうして私たちは神の教えに反発をするのです。ですから、律法はいかに私たちが神に逆らう者であるか、私たちが神の前に謙虚でない、従順でないということを明らかにしてくれると言うのです。

私たちがこのようなことを思うときに、本当に私は神を愛していると言えるのでしょうか？何か恐ろしくなりませんか？口で言うことは簡単だけれども、私たちの生き方を見たときに、私たちは神のみこころから外れていませんか？「主を愛することは主の命令に従うこと」とみことばは教えています。それなのに私たちはみことばを聞いて守ろうとしないのです。そして、私たちは堂々と人々の前で、神の前で言うのです。「私はあなたを愛しています」と…。

私たちは気づかなければいけません。私たちはどれほど愚かで罪深い者であるか、神の命令に対して従順に従って行くべき私たち被造物が、その神に対して従順でないという大きな罪を犯しているのです。

C. 律法は靈的に死んでいることを明らかにする 8b-11節

三つ目に、律法は生まれながらの人間は靈的に死んでいることを私たちに明らかにするのです。

1) 律法は本当の自分の姿を明らかにする。

8b-9節の後半を見てください。「**律法がなければ、罪は死んだものです。:9 私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。**」、パウロはこの二つの節で対比をしています。「律法がないときは罪は死んでいた。罪が死んでいたときは私は生きていた」、ところが、「戒めが来たときは今度は罪が生きて私は死んだ」と言うのです。このように対比していることに私たちは気づきます。この箇所を理解するために簡単に説明します。

(a) 「律法がなければ」と「戒めが来たときに」

これは律法が与えられる前、律法が教えられる前のことを言っているのではありません。ここで言われているのは律法に対する理解のことです。律法がわかる、律法を悟るということです。

(b) 「罪は死んだ」と「罪は生きて」

これは罪の生死のことではなく罪の活動、罪が働くということです。

(c) 「生きていました」と「死にました」

これは永遠のいのちのこと、救いのことです。

(a) について

律法は本当の自分を明らかにします。ここでパウロが言いたかったのは、自分は戒めを守れない者であるだけでなく、その戒めを破っていることに気づいていなかったということです。自分には何も問題がないと思っていたときの自分自身のことです。パウロは幼いころから律法を熱心に学んでいました。ですから、律法の教えはよく知っていたのです。しかし、彼はその教えのこともよくわかっていないし、また、その教えを自分は犯している、破っているということを私は全くわかっていなかったと言うのです。だから、パウロは律法を一生懸命遵守しているときに「私は大丈夫、私は神の前に喜ばれる」と思っていたのです。ですから、ピリピ3：6で「**その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。**」とパウロは言います。何も非難されるところがない、私は完全ですと言うのです。そのような人が聖書の中に何人も登場します。ひとりはその裕福な青年です。マタイの福音書19章に出て来ます。皆さんもよく覚えておられると思うので簡単に説明しますが、ひとりの人がイエスのもとに来て言います。「**先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。**」（19：16）と。イエスは彼にこのように言います。17節～「**なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。**」、すると彼はこう言います。「**どの戒めですか。**」と、イエスは彼に対して「**殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。：19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。**」と戒めを挙げられたのです。すると青年はこう言います。「**そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。**」と。つまり、この青年は自分の罪深さに気づいていなかったのです。戒めは知っていました。しかし、自分がその戒めを犯しているということには気づいていなかったのです。罪のことがよくわかっていなかったのです。

(b) について

ですから、その次に「罪は死んだ」、「罪は生きた」ということを教えているのです。これは罪の生死ではなく罪の活動のことだと言いました。つまり、「罪は死んだ」というのは罪についてよくわからないということです。死んでいるためにその罪が活発に働いていないのです。もちろん、生きていたら活発に働きます。そうすると、それによって罪の実態も見えて来る、死んでいたならよくわからないというのです。ですから、この8節には、律法がなければ、自分が律法を破っているということがわかっていなかった、罪は死んでいた、罪が活発に働いていなかったから自分が罪人であるということがわからなかったと記されているのです。ところが、9節の後半を見ると、「戒めが来たとき」に自分が律法を犯している、神の戒めを破っていることに気づいた、罪が生きたと言うのです。罪が活発に働き始めた。私たちが見て来たように、神の命令を聞いたときに自分はその命令に逆らっているということに気づくのです。神の命令を聞いたときに罪が働いて、私たちがその命令に従って行かないようにと働く、まさに、罪が活発に活動しているのです。

確かにおもしろい表現を使っているのですが、パウロが言いたいことはわかります。今まで見て来たように、律法が与えられたことによって自分が神の前にどのような存在であるかというのが明らかにされるのです。しかも、自分がどれほど罪深い者であるかというのは、自分がその神の律法に対して取る態度によって明らかになるのです。パウロはローマ5：13で「**というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。**」と述べています。律法が与えられることによって初めて自分の姿が見えたわけですね。

(c) について

もう一度、8節後半から「**律法がなければ、罪は死んだものです。：9 私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。**」、永遠のいのちのことと言いました。律法のことがよくわからずに自分がその律法を犯しているということに全然気づいていなかったときに、私は生きていたと思っていたとパウロは言っているのです。つまり、私は永遠のいのちをいただいていると思っていたということです。ところが、戒めがやって来たときに、私のうちにある罪がそれに対して反発することによって、自分はその神の戒めを犯しているということに気づいたと言うのです。何がわかったのでしょうか？自分は永遠のいのちをいただいていると思ったのに、このように罪を犯している罪人であるゆえに、私は実のところ、永遠のいのちをいただいているということに気づいたと言っているのです。実際には、霊的に死んでいる者だということに私は気づいたとパウロは言うわけですね。

これは、確かに神の働きです。私たちはイエス・キリストを信じていなかったときも、良心をもっているゆえに、ある程度の善悪の判断はできます。しかし、自分が神の前にどれほど罪深い者であるか、神の戒めをことごとく破っている違反者、罪人であるということに気づくのは、長い年月をかけた学びではなく、神の働きが必要なのです。神がその人のうちに働いて初めて私たちはそのことに気づかされるのです。「**その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。**」と、

イエスはヨハネ16：8で言われました。私たちは同じメッセージを何度も聞いていても、自分の本当の姿にはなかなか気づきません。でも、神が私たちのうちに働かれたときに私たちは本当の自分というものに気づかされるのです。そして、自分の罪深さに気づき、私たちは神の前に赦しを求めて出て行くとするのです。

2) 律法は自分の未来を明らかにする

律法は本当の自分を明らかにすると8-9節で教えたパウロは、もう一つ、10-11節では、律法は同時に自分の未来を明らかにすると教えています。彼はこう言います。「**それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。**」と。パウロは戒めがどのようなものかを教えています。「**いのちに導くはずのこの戒めが**」と、確かにそのとおりです。神の律法は永遠のいのち、祝福をもたらすものです。たとえば、「**『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』**」(マタイ22：17)と、このことを私たちが完璧に行なうなら神の救い、祝福があるわけです。確かに、戒めはいのちに導くのです。ところが、却ってそれが死に導くものであることがわかったと言います。つまり、パウロたちの問題は、その永遠のいのちをもたらす教えを完璧に守るために必死に尽くしたことです。彼らはそれを守れると思ったからです。そして、その結果は死を身に招くことになったのです。戒めが悪いのではなく、それを守り行なっていない私が間違っていると言うのです。そして、神がこうすればいのちを得るという教えに対して逆らっているゆえに、自分が自分自身のうちに死を招くことになったとパウロは言うのです。

ガラテヤ人への手紙の3：21でパウロはこのように教えています。「**とすると、律法は神の約束に反するのでしょうか。絶対にそんなことはありません。もしも、与えられた律法がいのちを与えることのできるものであったなら、義は確かに律法によるものだったでしょう。**」と。律法を守ることによって永遠のいのちを得ることができるなら、救いは律法によって与えられると言える、しかし、それは不可能である、律法を完璧に守ることができる人はだれひとりいないからです。だから、律法によって義とされることは有り得ないのです。確かに、戒めは間違っていないのです。戒めは神のみこころなのです。神が望んでおられることです。律法は私たちに私たちが有罪であることを明らかにします。律法がなければ私たちは律法を破っていることに気づくことはありません。戒めがなければ自分はその戒めに不従順であることに気づかないのです。ですから、律法は死をもたらすのではなく、私たちが生まれながらにすでに死んでいることを明らかにしたのです。私たちは霊的に永遠に死んでいるのです。そのことを私たちに悟らせるために、神は律法をくださったのです。そして、律法と自分とを比較したときにそのことが明らかになったのです。そして、そこに備えられたすばらしい救いを見るのです。こんなに神に逆らい続けた者に神はすばらしい救いを備えてくださった、そして、神が私たちに救いへと導いてくださり、イエス・キリストを信じますという決心に至ったのです。すべて、神がなされたことです。

11節でパウロは警告をしています。「**それは、戒めによって機会を捕えた罪が私を欺き、戒めによって私を殺したからです。**」と。パウロが繰り返して言うことは、律法や戒めが悪い、罪ではなく、私たちのうちにある罪が問題だということです。彼は、気をつけなければ行ないによる救いという間違った教えによってだまされてしまうと言うのです。ここで使われている「**欺き**」ということばは新約聖書の中に6回出て来ますが、その中の2回は、創世記に記されているエバがサタンによってだまされたことを表わすときに用いたことばです。そのことはⅡコリント11：3にも出て来ます。「**しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。**」、また、Ⅰテモテ2：14にも「**また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました。**」とある通りです。パウロはこの「**欺き**」ということばをここで使ったとき、蛇がエバを誘惑したこと、欺いたことを覚えるのです。そして、人々に警告するのです。気をつけなければ、エバがそうであったように罪はあなたを欺くように働きを為すと。罪は私たちに欺き、私たちに惑わし、真理から遠ざかって行くようにと働き続けて行くのです。神の前に正しい者にならないように、神に喜ばれる者にならないように邪魔をし続けて行くのです。イエスを信じていない者には信じないように邪魔をします。信じた者たちにも神のみこころに従って行かないようにと邪魔をします。ですから、罪はチャンスをおねらっているのです。私たちが神のみことばを通してみこころを知らされたとき、罪は私たちに働いてこのような言い訳を言わせます。私はあなたが望んでおられることをしたくありません、私には難し過ぎてできません、私の信仰は弱いから…と。言っていることは一つです。私はあなたに従いませんと、罪がそのようにあなたのうちに働いて、神に対して従順な歩みをしないようにとあなたを惑わし続ける、そのような働きがあるとパウロは教えるのです。

エバの誘惑を思い出してください。彼女の最大の問題は「**みことばに立たなかった**」ことです。「**神は、ほんとうに言われたのですか。**」(創世記3：1)と。私たちも同じことを注意しなければいけません。私たちの信仰は、私はこう思うとか、私はこう考えるとか、私はこのような体験をしたというものはあ

りません。また、私たちの感情に立っているのでもありません。神がこのように言われた、だから、私はその通り信じる、これが神が望んでおられる信仰者の姿です。神のおことばが私たちの土台です。私たちの信仰が常に聖書に根づいていなければ、私たちはいろいろな惑わしに惑わされてしまうと言うのです。パウロ自身も律法を守り行なえば永遠のいのちを得ることができると信じ、しかも、自分は永遠のいのちを得ていると思っていたのです。救われていると思っていたのです。けれども、実はそうではなかったのです。自分勝手な解釈に私たちは気をつけなければいけないのです。みことばに立たなければいけません。なぜなら、罪はこのような働きをするからです。

今日、お帰りになったらこのように試みてください。私の信仰はいったい何に立っているか、今日、私が死んだらどこへ行くのか？クリスチャンの皆さんは天国だと言われるでしょう。では、なぜ、私は天国へ行くことができるのか、その確信はどこにあるのか？なぜ、そう言い切れるのか？その問い掛けに自ら答えてみてください。願わくは、皆さんが聖書がこのように言っているからと、そのような信仰者であるように。

D. 律法は罪の恐ろしさを明らかにする 12-13節

最後に、12-13節で「律法は罪の恐ろしさを明らかにする」とそのことを明らかにします。「**ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。:13 では、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。**」と。

1) 戒めは聖なるもの

パウロがまたここで繰り返すことは戒めも掟も律法もすべて聖なるものだということです。なぜでしょう？最初から見て来ているように、律法は神の教えですからそこには神のご性質が反映されています。神が「正しくありなさい、聖くありなさい」と言われるのはご自分が正しく聖いことを明らかにするのです。ジョン・マレーが言ったように「律法は神の完全性の写しである」と。すばらしいものです。そこには創始者のおもかげがあると云います。ですから、律法を見て私たちはそれを与えられた神がどのような方であるかを知るのです。そこで質問が生じます。そのようにすばらしい聖なる戒めが私に死をもたらすのですか？と。パウロは答えます、「**絶対にそんなことはありません**」と。その後を見てください。「**それはむしろ、罪なのです。**」と、戒めが問題ではなく戒めを犯すこと、つまり、罪が問題だと言っているのです。私たちのうちに生まれながらに内在している罪が問題なのです。

2) 律法によって罪の実態が明らかにされた

そして、律法によって罪の実態が明らかにされた、罪の罪深さが明らかにされたと言います。「**罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされ、**」と、罪は私たちに不幸を、わざわいをもたらします。救われていない者に永遠の地獄をもたらします。救われているあなたに神の祝福をいただかないように働くのが罪です。律法によって私たちがどれほど神の前に背を向けて歩んでいる罪人であるか、どれほど神のみこころから外れているか、それに逆らっているかということが明らかになったのです。そのようなメッセージを人々は語り続けて来ました。ペンテコステのときも、あのステパノのメッセージもそうでした。彼らは常に私たちがどれほど罪深い者であるかを明らかにしました。そのときに人々はその罪深さに気づかされて、救われるために何をしなければいけないかと、神の前に救いを求めて出て来たのです。使徒の働き2:37「**人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか。」と言った。**」

クリスチャンの皆さん、この福音のすばらしさ、救いのメッセージのすばらしさを知るためには、私たちは自分の罪深さを正しく知ることが必要です。そして、そのことを神はあなたのうちに確実に為されます。あなたがみことばを真剣に学び、そのみことばを実践して行くなれば、神はあなたを砕いて行きます。そして、あなたが心から神を崇める者へ変えて行ってくださるのです。私たちは自分の罪深さがわかるほどに、どうしてこんな者を神は救ってくださったのかと、そのことに驚愕するのです。

3) 罪は極度に罪深いものである

罪は半端なものではないとパウロは言います。「**戒めによって、極度に罪深いものとなりました。**」と。なぜ、パウロはこのように言ったのでしょうか？罪は神の前に正しい聖いこの律法を用いて、人を永遠の死へ導こうとするからです。罪はあなたに「あなたは守られている、あなたは結構いい人間ですよ、あなたは大丈夫です」と、様々な惑わしをもってあなたを混乱させ、あなたが神に従順に従って行かないように働き続けるのです。そして、神の前にへりくだって救いをいただくのではなく、自分の方法で救いを得ていくようにと誘惑するのです。それほど、罪は「**極度に罪深いもの**」です。これが私たちのうちにあるのです。使徒7:51-53「**かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、先祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。:52 あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者がだれかあったのでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。:53 あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、そ**

れを守ったことはありません。」

だから、私たちは地上にあってこの罪との戦いを戦い続けて行くのです。パウロはこの後、14節から私たちはこの罪の力から解放されることは無理だと教えます。イエスを信じる前も無理だし、信じた後も私たちは自分の力で罪には勝てないと言います。そして、8章になって、8：1－4で「でも、不可能ではなく、私たちのうちにある聖霊なる神の力によってそれは可能だということを教えます。罪は恐ろしいものです。私たちを誘惑し続けます。しかし、感謝なことに、その罪に打ち勝つ力を神は私たちに備えてくれたのです。どうすれば、私たちは罪に打ち勝ち主の栄光を現わし主に喜ばれる生き方をして行くことができるのでしょうか？続けて、みことばを学んで行きましょう。使徒17：30「**神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」**

どのような私であるのか、どのような私が神の目に映っているのか、信仰者の皆さん、ぜひ、覚えてください。パウロが言ったように、私たちの何ものも神の前に誇ることはできません。私たちが誇ることができるのはただ一つだけです。こんな罪深い私を救ってくれた救い主イエス・キリストです。この方が私たちの誇りです。そして、その感謝が増し加わるためには、主のみことばをしっかりと学ぶことです。そのみことばと自らを照らし合わせることによって、私たちの醜さが見えて来ます。そのときに、私たちには心からの感謝が生まれるのです。主よ、こんな者を救ってくださってありがとうございます、感謝しますと。そのように生きて行くのです。主に感謝しながら主を誇りながら…。